みに岡野と杏所は同年の生まれだという。また翠軒は、寛政二年には司馬江漢と関わりの深かった経世学者本多利明から蝦夷地の情報に関する教えを受けたり、寛政十一年には領内の調査を依頼するほどの間柄であった（『水戸市史　中巻』二、昭和四十四年九月）。その利明は江漢の《地球図》や《天球図》の訂正者として知られており、《天球図》には「本田三郎右衛門訂正」と摺り込まれている人物でもある。

岡野の役職である郡奉行は、水戸藩内では役高三百石前後の中級の役職で、それまで五人の郡奉行が各地域を管轄していた。それが享和二年に藩政の行き詰まりを打開するために十一郡制に改められ、その折、岡野は翠軒の推挙によって郡奉行に抜擢されたのである。その任地は現在高萩市に隣接する県北の里美村内にある小菅村に陣屋が置かれ、周辺の四十三カ村を管轄し、総石高二万三千九百三十七石余であったという（前田香径編『立原翠軒』昭和三十八年、立原善重刊行）。

郡奉行に転出する以前は、江戸藩邸詰近習番を勤めて居たといい、翠軒の近しい弟子であることを考えれば、本多利明を介して江漢宅を訪ねたとしても何の不思議もないだろう。年齢的にも二十代半ばの最も知的好奇心の旺盛な時期であり、江漢宅を訪ねて江漢の幻惑的な天文地理を問うたことがあったかもしれない。そしてそれは丁度、《天球図》が制作された時期とも合致するのである。このようなことから判断して、本書簡の宛て先の岡野庄五郎が、水戸藩の岡野と見てほぼ間違いないだろう。

私の許には一誠堂等の神田の有名古書店の目録は送られてこないので知らなかったのだが、N書店では以前、本書簡を目録に掲載したが何の反応もなかったという。たまたまインターネットに掲載してみたところ、「まさかこのような応答があるとは思いもしなかった。インターネットもまんざらすてたものではないですね」と驚いていた。いずれにしても寛政期後半から享和年間あたりの江漢書簡の現物が一通改めて確認されたわけである。木茂先生は「また森は骨董買いをして」と苦笑されておられたが……

（水戸関係の資料は、茨城在住の同人金子一夫氏から提供を受けた。）

春靄か秋水か—土佐紀行から—

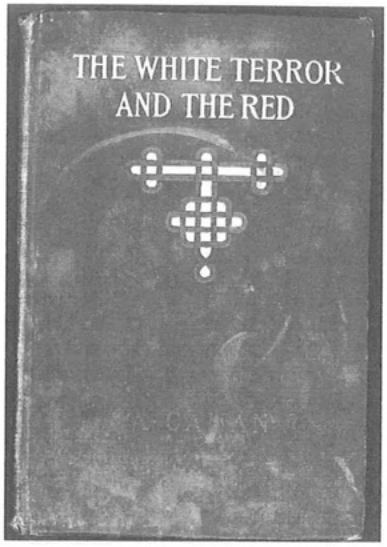
森　仁史

いつぞや丹尾同人が書いていたように、重なるときには重なるのである。筆者は前々号に岩村透について書いたとき、彼の出身地土佐を訪ねてみたいという思いがした。そうしたら、高円寺の古書展で思いがけず幸徳秋水の旧蔵書〔図1〕を手に入れたのだ。調べてみると、後の秋水幸徳伝次郎は十七歳で故郷中村を出奔し、隣町出身の林有造、すなわち岩村の叔父を頼って上京していたのだった。その前に、我が松戸の書肆三好企画から出された木村林吉『目のない自画像』〔図2〕という伝次郎の甥であった幸徳幸衛の伝記を読んで、このあまり知られることのなかった作家の数奇な運命に興味を引かれていたところだった。明治三十八年、十五歳の幸衛は秋水に同行して渡米し、叔父の帰国後も彼の地にとどまりバークレー美術学校などで画家修行を続け、作家として開眼し幸徳の死後の昭和二年には渡欧するのだが、昭和四年に帰国することになり、土陽美術会などで展覧会をひらくものの不遇なまま昭和八年に大阪で没した。にわかに彼だけでなく、秋水やその周辺に連なる土佐が気になりだしたのだった。

待望叶ってこの夏に岩村の故郷宿毛と幸徳の故郷中村を訪ねることができた。宿毛の街は近年区画整理されたらしく、広い通りが縦横に整備され家並みは一新されたようだった。人通りのまばらな商店街の中心には高田早苗の記念広場があった。かろうじて岩村が帰郷の折に滞在したと思われる旧林有造邸〔図3〕を見つけることができた。同邸の近くには竹内綱・明太郎父子の真新しい記念碑が建っていた。明治にはなかなかの人物を輩出した町なのである。次いで中村を訪れた。街は四万十川の度々の洪水や昭和二十一年の南海地震によって往時を偲ぶべくもなかったが、京都から

やってきて土着した一條家が開いたいかにも小京都風な街路が残り、街の中心の小さな丘に大名家守護神として山城国石清水八幡宮を勧請した不破八幡宮が鎮座していた。そこから程近い市立図書館の階上にあがって、保存されている秋水の遺品群をみることができた。秋水の使っていたごく質素な書机や書架も展示され、かれが「煤竹の三段の棚」と遺書で言ったのはこれだろうかと思った。ほかに、かなりの蔵書（図書館作製の目録によれば一一〇タイトル余）や伝次郎の小学生時代からのノートや教科書、書跡などが展示されていた。そのなかに、伝次郎十九歳の明治二十四年三月の年期のある絵馬〔図4〕が掲げられていた。上京を前に不破八幡に納めたもので、西行を描いたというそれは白木の板に墨で描かれ、淡彩が施されたものだが、なかなかの出来栄えである。西行が源頼朝から貰った金の猫を子供に与える説話が題材となっている。この年四月には上京して国民英学会に学ぶが、この時書かれたと思しき英語教科書手写本 "The Life of Sir Walter Scott" には走り去る騎馬が悪戯描きされている。なかなかに絵心があったと思えるのだ。秋水の妻師岡千代子は国学者節斎正胤の娘で、彼女が描いた山水画もここに展示されている。秋水は「小生は儒教より社会主義に入り候」と明快に書き残しているが、かれやその郷党が育った明治初期の中村にはこうした近世的な教養世界が色濃く残されていたに違いない。それは単に四書五経の素読という伝統的な名文に習う文章表現の訓練だけでなく、座敷の床の間や仲間の集まりで絵画や音曲を楽しむ時間も含まれていなければならなかった。少なくとも若い伝次郎は幾つかの伝承物語のうち西行を題材に選ぶことができたし、毛筆を使って歴史上の人物像を破綻なく描けるような修練を経ていたことは間違いない。

その足で幸徳家の墓地を訪ねたが、小泉三申筆になる決して小さくはない墓標は明治四十四年十一月に義兄駒太郎の手で建てられており、罪状に較べてその追悼の思いが罪名に反して意外に早く形になったように感じた。それは幸徳幸衛の帰国に際して、地元の土陽美術会や高知新聞社が示した迎え方の暖かさと同質のものかもしれない。土陽美術会というのは彫刻家本山白雲を実務的な中心とし、佐川出身の田中光顕がバックアップして明治四十年十二月に創立された土佐出身者の美術愛好団体である。広瀬東畝（東京高等工業学校工業図案科教授）や千頭庸哉（東京美術学校図案科教授）という図案関係者も創立メンバーに加わっていた。石川寅治が表紙を飾る『土陽美術』を大正二年十月に創刊し、ながらく結束固く意気盛ん



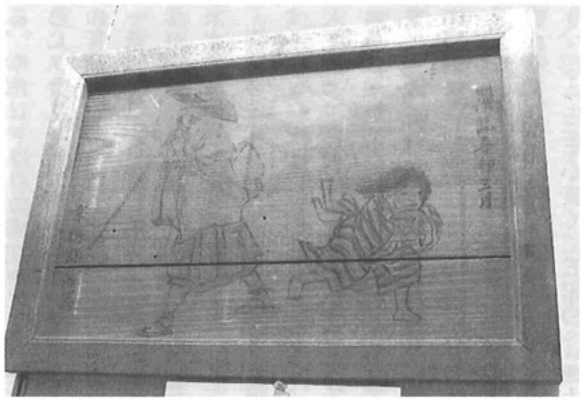
1　A. Cahan, The White Terror and The Red, N. Y., 1905.

2　木村林吉『目のない自画像　画家幸徳幸衛の生涯』三好企画、2001年

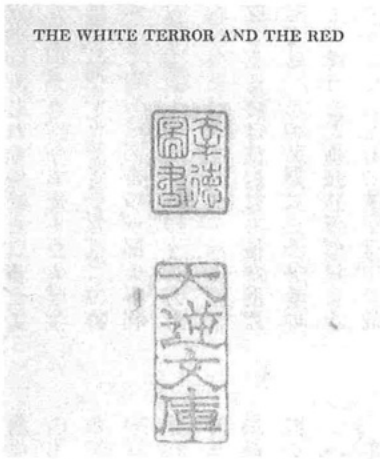
3　旧林有造邸（明治二十二年竣工）

で大正七年には日本橋三越で創立十周年記念展を開くほどであった。中村では、現在も地元の老舗や画廊が秋水を偲ぼうとする企てを維持しており、こうした意識が今も受け継がれているように感じた。ただ、その日は「秋水餅」を賞味できなかったのが甚だ心残りとなった。

今回俄か勉強で数種類の伝記を読んでみて感じたのは、我々が歴史上の人物をともすればその思想や行動の完結した姿から判断しがちなことである。幸徳の社会主義やアナルコ・サンジカリズムはもともと彼のうちに胚胎したものではなく、まさに土佐の山間中村に生まれて明治の空気にアンテナを立てて、そこに押し寄せた世界の思潮のうちから敏感な知識人が選び取ったものであったはずだ。幸徳の師への思いがほとばしる『兆民先生』（明治三十五年刊）のなかに、明治二十六年頃に兆民から高利貸の処世の秘訣は朦朧たるにあるのだからと「春靄」なる号を勧められ、秋水は朦朧を憎むという信条に反するからと答え「秋水」という号を送られたというエピソードを記している。これは秋水の三度目の兆民学僕時代なのだが、「兆民先生行状記」（明治二十六年筆記）によれば、このとき師から言い付かって、「四月…予は〔安田〕老山の書画二幅と外一幅を肩にして、麹町三番町なる古川銕耕〔東陸　東京の篆刻家、清客馮鏡如の門〕の宅へ遣わされぬ、同氏の周旋にて売却せんことを依頼せしなりき。銕耕は彫刻家にて雅人の交際あり、口訥にて酒を嗜む、性豪快、確かに奇人伝の人物なり。幅は中々容易に売れず。」と記していて、美術骨董品の値踏みの交渉まで任されていたようだ。兆民は秋水と酒がすすめば、「令閨とスハマに卓を囲みて談論佳境に入り、文章詩歌のこと、音曲美術の事、社会教育のこと、経済政治のこと、英雄豪傑仁義釈教無常の事、持ち出さぬ物とてなく、果ては例の如く先生杜詩を吟じ端唄を唄い騒ぎし後、十一時頃寝に就かれぬ。」というありさまだったようである。我々には経済政治よりも美術が先に登場するあたりに大いに興味をそそられるところである。ただし、兆民が大阪で浄瑠璃に熱中したことは『一年有半』（明治三十四年刊）に具体的に語られているものの（先の秋水文庫にも浄瑠璃の図書が含まれている）、美術については僅かの記述から推測するしかない。



4　幸徳伝次郎筆「絵馬」（明治24年３月）



5　図１の扉ページの蔵書印部分

飛鳥井雅道が指摘しているのだが、幸徳がその生涯にわたる師であったこの中江兆民から遣わされた「文章経国大業不朽盛事」の書を明治三十六年平民新聞編集局に掲げた意味こそが幸徳の生き方の根幹に関わる身上であったとしなければならない。恐らく、社会的不公平に憤る正義漢から社会主義者へと思想的な立場を変容させていったとしても、幸徳にとっては文筆に賭ける思いは終世変わらなかったように筆者にも思える。

この意味で、明治の社会主義者が同時代のロシアのマルクス主義者よりもナロードニキに深く共感を寄せたことはごく自然なように思われる。同じく土佐出身の宮崎夢柳による「虚無党実伝記　鬼啾啾」（明治十七年）などの翻案小説には多くの挿絵が描かれ、一層その共感を呼び覚ましたことだっただろう。筆者がでくわした幸徳旧蔵書もそうした著作の類で、アメリカに亡命したユダヤ人ナロードニキが執筆した自伝的小説であ

る。幸徳はアメリカ滞在中にこの本を読んだのかもしれない。ところどころにスカーレットの色鉛筆でアンダーラインが引かれ、ギムナジウム学生の苦悩の段落には「頓悟機熟」、ツァーリの周囲に同志を送り込む作戦に「亦一策」、などと書き込んでいる。幸徳刑死後、その所蔵図書の一部を堺利彦が譲り受け、これらの新聞や図書に「大逆文庫」〔図5〕という長方形朱文印が押されたという。

幸徳のこうした生の声がもっとも鮮明に聞こえるのは皮肉にも彼が刑死することになった裁判以後のことのように思える。この時期にこそ多くの人々によってドキュメントが残されているし、そうした極限状況だけになおさら純粋に自己の信条だけを吐露できたようにも思える。彼が獄中で最後に完成させたのが『基督抹殺論』（明治四十四年刊）である。ここで彼の議論はきわめてオーソドックスにキリスト伝の信憑性とその教義の形成と論理を衝いている。まさに畢竟の著作と呼べるだろう。と同時に、この書が幸徳にとっての兆民の『一年有半』であったとも言っておこう。つまり、「マァ三年か長くて五年の」（四十二年一月の手紙）余命を宣告されたような後のない時間に何を残すべきかと考えたとき、「文筆大業」に照らして師の行動と自己をオーバーラップさせないはずがない。同じ意味で、漢詩文がその意識のありかを探るうえで重要だ。中村公園に残るもののほかに、多くの漢詩を残している。まだ死刑囚に対して、最後の感懐を書き残すために硯と墨だけでなく朱肉や石印も死刑宣告後もどうやら許されていたらしく、十二月につくり、死刑宣告二日目に再度書いた漢詩が展示されていた。

世年剔盡読書燈　今日空餘病骨稜
石壁天窓窺健鶻　鉄窓風冷憫飢蠅
幽居恰似山中寺　趺坐自疑物外僧
偏喜人情随処見　於吾獄吏亦親朋

獄中書懐辛亥一月
死刑宣告後二日

秋水囚人　幸徳伝印（朱文方印）　秋水堂□（朱文方印）

もっとも明治四十三年六月一日に逮捕され翌年一月二十四日には処刑されてしまうのだから、獄中ではもはや絵を描くほどの余裕はなかったらしい。けれども、十二月十八日の手紙では

「幸衛も米国で画のけいこを致して居ります、遠からず上手になつて返りましやうから楽しみにして」いるようである。明治四十四年一月付けの最後に近い手紙のなかで、幸徳伝次郎は家蔵の書画の行方を細かに指示している。

「書画の掛物の内、伊川院〔狩野栄信〕の三幅対、高揚山人〔中山高陽土佐〕の人物、福原五岳〔備後〕の二幅対などは亀治兄上が秘蔵でしたから幸衛に渡さねばなりますまいが、あとは大概元から内にあつたのと私がこさへたので、是も幸衛、富治〔駒太郎の子〕両人に二つに分けたらよひかと思ひます。尤も此中、中江〔兆民〕先生の書と、先生から貰つた橋本霞所筆山桜の二つを両人が一づゝ分けるやうにして下さい」

と細かに指示している。同じ手紙のなかで、幸徳家の家系図とその複製を幸衛、富治に渡すよう依頼している。この系図に拠れば、幸徳家は遠くは「京都陰陽博士従五位下幸徳某」にさかのぼると伝える家系であり、結核で自己の余命を意識することとこの家系の意識は全く別物ではなかったようにも感じられる。

こうして、とりとめもなく幸徳伝次郎の生き様を振り返ってみると、この人物が文字通り明治文化の真髄を生きたことを得心できる。その生き様と志操に筆者は満腔の共感を覚えるのだ。しかし、幸徳が中江から受け継いだようには、学識乏しい筆者には明治の精神をそのまま受けとめることはできないだろう。それでも、幾重にも屈折しながら流露する日本の近代をその志において受けとめたいと願わずにいられないのが現在の筆者の願望であり課題だというありふれた確認に至ったのだった。

秋水が刑死を指してつぶやいた一言を繰り返しておこう。「あ　れで可いのだ」。

一寸

第十六号　二〇〇三年十月

第十六号目次

新・旧刊案内16　太平洋戦争下の出版事情、その他　青木　茂　1
再考・版元中島重太郎の版画集発行　―昭和の戦時中の版画発行広告より―　岩切信一郎　7
残されたひとやま《つき》（その1）　―藤牧版画の後摺りについて9　大谷　芳久　16
図画教育者列伝（二）　松田霞城（その六）　金子　一夫　22
ギゾー様、まいる　丹尾　安典　25
再出の江漢書簡　銅・石版画遺聞14　森　登　28
春靄か秋水か―土佐紀行から―　森　仁史　31
久米民十郎とブルリュークの絵葉書　―イマジュリイ資料散策①―　山田　俊幸　35
第八号から第十五号　執筆一覧　39

新・旧刊案内16　太平洋戦争下の出版事情、その他

青木　茂

■『一寸』はどこにも書いてはないが年四回の季刊誌であるらしい。この夏三ヶ月にもいろんなことがあり、あるいは何もなかったかのようである。私も寧日なしで越後、名古屋、信州、裏日本、神戸、下野に五里霧のなかを往返し、こころに重く沈むものを見、あるいは上ッ面を撫でたようである。恒例の中国旅行は年を経て息が乱れて行けなかった。この間に

・瀬木慎一・桂木紫穂編著『日本美術の社会史』平成十五年六月二十日、里文出版、A5判、四六九ページ

が出て「縄文期から近代の市場へ」という副題が示す美術社会史が日本で初めて提示された。総説を編者が書き、諸家の論を収録した本である。採録された貴重な論文も、編者による概説や関連文献一覧も、実に広く深く読み込まれていて、私を含め自称他称の美術史家は以て他山の石とし、この本を充分に利用してほしいと思う。もう一冊を挙げると

・菊畑茂久馬『絵かきが語る近代美術』二〇〇三年八月十五日、弦書房（福岡市）、A5判、二四一＋五ページ

が「高橋由一からフジタまで」の副題で出た。発行日が敗戦記念日というのが、フジタと天皇をいつも射程距離においている菊畑氏らしくうれしいではないか。絵かきらしく事実と喰いちがっているところもあるが、菊畑氏の心情では歴史的真実なのである。事実だけを羅列して心情的真実を無視するから、美術史の叙述が面白くないのである。ツボ（現行では壺）という字を断固「壺」とするのは、菊畑氏の眼にはツボを文字にすると「壺」しかないらしい（私は「壺」字に固執はしないが、氏の思いに同感する）。私は夕暮れに読みはじめ、考え考え読み通して倒れた。『日本美術の社会史』